

## 第6編 合成染料による色大島紬の染色法

### 第1章 総糸染色法

#### 1. 丸鍋及び角鍋で手染する方法

##### ア 染料の計算法

1例 — 13算, 8足分 糸50総×45g = 2,250g

黒色	ダイレクトファストブラックR	4%	……	90g
	カヤカラブラックBGL	3%	……	67.5g
	ダイレクトダークグリーンAB	0.5%	……	11.25g

2,250g	2,250g	2,250g	…… この数字は%を100で割ったもので以下この方法で計算する。
× 0.04	× 0.03	× 0.005	
90.00	67.50	11.250	

##### イ 染色法

- 上記染色に要する水量は80～100ℓ
- 染釜は丸釜であれば、口径60、深さ55センチ。角釜は90と55センチ角、深さ55センチの釜
- 染料はできれば別々に5分程度煮沸溶解して染液に加える。
- 酢酸は30cc位加える。
- 冷液から染め始め、休みなく糸を染カギで繰返し染色しながら50・60℃となす。
- その後糸を染竿の上にからげて乗せ、さらに酢酸を20cc程度加える。
- 糸を染液に浸し休みなく繰返ししながら昇温し、20分位で煮沸に至らしめ、30分程度煮染する。

これによって堅牢に染色され、又色も発色するのである。

##### ウ この染色でムラ染になる原因

- 染液の温度が40～70℃の頃糸の操作が不十分であった場合
- 染液の温度を早く上げた場合
- 酢酸を多く入れ過ぎた場合
- 染釜が小さく、又浅く水量が少なかった場合
- 含金属染料だけで染色した場合
- 糸質が悪るかった場合

## 2. 噴射式総糸自動染色機で染色する方法

### ア 染料の計算法

前記丸鍋の染色法に順じて染料は算出する。

### イ 染色法

- 総糸を掛ける筒が2筒の場合、経糸は100総、緯糸は80～90総を重ねないように糸を筒に掛ける。
- 水は噴射穴から水が十分噴出する量を入れる。
- ムラ染を防止するため、温湯又は60℃で5分程度運転した後排水して清水と入れ替える。
- 淡色の場合はプレスタピットオイルかアミラジンを20～100cc加え、さらに酢酸も20cc位入れて染色を開始する。
- 温度は徐々に昇温し、又50・60℃の頃蒸気バルブを止めしばらく運転する。
- その後、吸収状況によって酢酸を追加し、さらに昇温して染着度を調べる。
- その間総糸のもつれに注意すること。
- 以上の状態で煮沸に至らしめ30～40分染色して糸を取り出し水洗いする。
- 染色筒に総糸を多く掛けるとムラ染になり易いので染色する色の濃度や染料によって最適な糸量を掛けて染色すること。
- 自動染色機はムラ染を防止する働きはないので、前記を参考にムラ染しないよう機械を上手に取り扱うこと。

## 3. 総糸の淡色染色法（冷液染法）

この染色は淡い色を染色する場合おこなうのであるが、この方法で染色する理由は、

- ムラ染されないこと
- 能率的であること
- 1%程度以下の淡い色を染色する方法である。

### ア 丸釜や角釜で染色する方法

染色釜に大量の水を入れ、さらに少量のアズリンかプレスタピットオイルを加えた液を準備し、この液で一竿にタテは9総ヨコは8総程度に掛けた糸を入れ、ひととおりこの液で糸を振り付けして糸を湿した後、糸を水から取り上げつぎに少量の染料を加えて良く攪拌した後、先に湿した糸をこの染液に入れ、手早く糸を繰返し振付染する。つぎにこの染色でムラがなく、又目的の濃度に染色されない時は前記のようにして染料を加えるか、又酢酸を少量加えるか、

少し温度を上げるかして目的の濃度や色目に染色する。この場合も糸の操作を休んではいけない。色が合っていたら糸を取り上げ水洗いしないで脱水する。但し、この脱水は7分程度絞った方がよい。完全に絞ると色が淡くなる場合があり、又色合せも染色中は合っているでも、乾燥すると淡くなる場合があるので、これを勘案して色合せすること。乾燥は直射日光を避け、乾燥したらゆるくねじった糸を蒸気で50分処理する。

以上のように染色することを水染又は冷液染といい、淡色染にこの方法がおこなわれる。

#### イ 噴射式総糸自動染色機で染色する方法

機械で染色する場合も糸を掛ける筒に普通より少なく総糸を掛けること、さらに糸は重ねないように並べて掛ける。染液に少量のアゾリンかプレスタピットオイルを加えた液で機械を運転した後に、染料を少量加えて機械をしばらく運転、その後ムラがなければさらに染料を加える。ここで色が淡い時は染料をさらに加えるべきか、酢酸を加えるべきか、又昇温した方がよいか判断する。この三法を併用する等して色合せする。色が合ったら染色釜による染法に準じて脱水、乾燥、蒸熱処理する。

#### 4. 精練ムラの染直し法

近年生糸の精練は機械精練であるから、ムラ精練は殆んどないが、練ムラを判定する方法は、白糸の時点その部分が堅くローソクのような色をしている。このような糸を染色すると、その部分だけが濃く染色されるのがムラ練の特徴である。これを色ムラということで、ハイドロサルファイトで脱色してから染色してもムラは直らない。

こうした糸の染直し法は、清水に1%の石鹼、0.5%の炭酸ソーダ、又はアミラジン液で10~15分間精練してから水洗いし、新ためて染色することである。

#### 5. 緋を総解きし、揚粹した緋糸の染色法

この染色は合成染料で染色した緋を総解きし、揚粹した緋糸を合成染料で染色する方法である。

ア この緋の揚粹は1フス毎のくくり目の輪を広くし、引っぱられてもそのくくり目が狭くならないよう揚粹することが大切です。

イ 染色前の糊抜きは完全に糊抜きし、十分水洗いしてから染色すること。

ウ 染色に当っては、始めから酢酸を少量加えて染色することである。その理由は先に染色した緋ムシロの地色が落ちて緋の汚染を防止するためである。

エ 染料はやゝ染着の早い酸性染料を少量ずつ加え、できれば緋糸を少しもんで染色するとか、振り付け染してムラ染を防止することに重点して染色することである。

オ 又、均染剤を少し入れて染色することも必要である。

カ このような要領で染色しながら徐々に昇温して目的の濃度や色目に染色する。

キ この場合、先に染色した緋の地色が染色中脱落し、染液が汚れる。その汚れがこの染色を変色させるので、この水の汚れがひどくなったら緋を絞り上げた後、その汚染の水を全部捨てて清水と取り替え、さらにウからカの方法で目的の色に染色する。

ク このようにして目的の色が染色されたら緋糸を取り上げ、脱水機で6分絞した後かるく糸をたたいて伸ばし、乾燥する。乾燥後40分位蒸熱処理して水洗いして仕上げる。

ケ この染色で緋の地色が落ちないようにするには、緋ムシロの地染を含金属染料で染色し蒸気で十分蒸し、さらに2%のシルクフィックス処理すると脱落を大体防止することができる。

## 6. 総糸染における染料の追加法

煮染した後色が合わず染料を追加する必要がある場合は、糸を取り上げ、又機械染は運転を止め、染液を全部又は $\frac{2}{3}$ 程度排水した後水を入れ、その水温を30・40℃となす。但し黒色の場合は50℃程度でよい。染料を追加する前に水を入れ温度を下げた染液で3・4回繰返し、又総染機の場合は4・5分間噴射回転して糸の温度と水温とを同じにする。これはムラ染を防止するため。

つぎに染料や酢酸は2・3回に分けて加え、ムラが発生しない状態に染色された時、徐々に昇温して煮染する。この間糸は休みなく繰返し自動染色機もこれと同様運転して目的の色に染色する。

## 第2章 緋ムシロの地色染色法

この染色は緋ムシロを合成染料で地色を染色する方法である。

### 1. 染料の算出法

ア 竜郷柄のような普通の緋は締上がり重量から20%重量を差引く。

イ 地あき緋はその地あきの多い少ないによって異なるが、大体10%程度重量を差引く。

ウ 小柄のようにガス糸が多い緋は約40%重量を差引いた緋の重量に染料%は算

出する。

例えば13算8足分締上がり重量約2,500gとした場合、染料の算出はガス系の分、約20%差引いた重量、即ち2,000gに対し染料%は算出する。

黒色染するとして

カヤカラブラックBGL	5%	…………	100g
ダイレクトファストブラックR	3%	…………	60g
2,000g	2,000g	…………	緋の重量
× 0.05	× 0.03	…………	染料の%
100.00	60.00	…………	染料の重量

## 2. 染色法

- 上記染料を約20ℓの湯で攪拌して溶解する。
- 洗たくタライに溶解した染料液を約10ℓ入れる。
- 水を加えてタライの8分目となして30・40℃となす。
- 酢酸10cc位入れる。
- つぎに先に糊抜きした緋ムシロを上記の染液にバラバラに入れる。
- 染液はシャリンバイ染色するように押えもみやもみ染を約15分位を要して、緋全体をこの染液で良くもんで十ノ字を切らすように染色した後、緋を絞り上げる。
- つぎに先に溶解した残りの染料全部タライに入れ、さらに酢酸を20cc程度加え、その温度を40・50℃になして、もう一度前のように緋をもみ染し緋を絞り上げる。
- つぎにこれまで染色したタライの染液を染釜に入れ、この液を95℃程度となし、さらに酢酸10cc程度加えた後、緋タテはバラバラにヨコ緋は広げて染釜に入れ攪拌染色すること5～8分程度、この間に煮沸する程度まで温度を昇温する。このように煮染したら緋を取り出し水洗い乾燥する。
- 摺込染しない緋は5～8分しか煮染していないので、乾燥後蒸熱処理50分位し、さらに水20ℓに40gの割のシルクフィックス液に20分間処理して水洗いする。

## 3. 緋が汚染する原因

上記は緋ムシロを地染する方法の1例を記したが、この染色によって緋を汚染することがある。その原因を記すと、つぎの場合に汚染し易い。

ア 緋締めが弱い場合

イ 緋締め用糊の粘度が低かった場合

- ウ 染色前の糊を抜き過ぎた場合
- エ 整経の手取りが多い場合
- オ 酸性染料だけで染色した場合
- カ 染液で長くもみ過ぎた場合

#### 4. 緋の十ノ字が切れて染色されない原因

なお染色で緋の十ノ字が切れて（十ノ字の切れとは緋ムシロの染色で大島紬の細かい緋が染色され、糸全体がムラなく染色されること）染色されない原因は大抵つぎの原因による場合である。

- ア 整経手取りが多かった場合
- イ 緋締め用糊粘度が堅過ぎた場合
- ウ 染色前の糊抜きが不十分の場合
- エ 含金属染料だけで染色した場合
- オ 染液の温度が低く、もみ染の時間が短かかった場合
- カ 中温液でのもみ染不十分の場合
- キ もみ染で染料を沢山吸収させずに煮染した場合
- ク 緋全体を平均にもみ染しなかった場合
- ケ 高い温度に緋を入れて煮染した場合

#### 5. 緋ムシロ染色における染料の追加法

緋ムシロを煮染した後、目的の色と合わない時これを修正する方法である。この場合、その煮染液に染料を追加し、その液で緋ムシロをもみ染しないで直ちに煮染するとムラになるのでつぎの方法で染色することである。

- ア 目的の色より緋ムシロの色が淡いとか違っていた場合

緋を水で湿し、洗たくタライに水を入れこれに不足する染料、及び助剤を加えて最初に準じてもみ染する。このタライでのもみ染で色が合ったら先の煮染液でさらに緋ムシロを2・3分間煮染する。

- イ 目的の色より緋ムシロの色が濃い場合

これは色が濃い訳であるから脱色する必要がある。この脱色法は1g/l程度の石鹼水で煮沸、脱色した後緋ムシロを水洗いする。ここで目的の色と合っていたら白水、酢酸水で2・3分煮染して仕上げる。

又、脱色によって淡くなったり色が違っていたら、前記のアに準じて染色する。

### 第3章 合成染料染色における緋の汚染

調査結果を参考までに記すと下記のとおり。

1. 大島紬は染色によって緋が汚染することがあるので、緋締めにおける絹糸の整経、手取り、本数と染料別及び染色法について調べた結果は下記のとおり。

○試料及び染色法

40g付き絹糸16本（2手取り）整経の緋ムシロを各染料を各々9%に酢酸2%を加えた染料液で5分間緋ムシロをもみ染した後、7分間染料液で煮染して緋の汚染度を分光光度計で測定した結果は下記表のとおりで、数値が低い程汚染していることを表わす。

染 料 名	汚 染 度
ダイレクトファストブラックR (直接染料)	25.7%
カヤノールミーリングブラックTLR (酸性染料)	17.5
カヤカラブラック2RL (含金属染料)	20.0
カヤカラブラックBGL ( " )	27.4

上記の結果を見ると、酸性染料のミーリングブラックが特に汚染し、含金属染料と直接染料が汚染しない結果が得られている。又、含金属染料でも2RLよりBGLが汚染せず、さらに汚染すると思われる直接染料が酸性染料より汚染しない結果が得られている。

つぎに、絹糸の抱合本数別及び染料の濃度別並びにもみ染及び煮染別の汚染度はつぎの表のとおり。

なお、絹糸は40g付き緯糸で整経の緋を染色、又数値は分光光度計による測定値で数値が低い程緋の汚染度が高いことを表わす。

染料名 及び濃度	整経加工別 染色法別	絹糸16本	絹糸20本	絹糸24本
		整経の絹	整経の絹	整経の絹
カヤ ダイ レクタ ブ ラ ック B G L R ○ 二 ・ 五 % (計5.5%)	酢 染料液で5分間 もみ染した後、 同液で5分間煮 染した絹	38.5%	36.4%	29.5%
	酸 染料液で5分間 もみ染した後、 同液で10分間煮 染した絹	30.5%	29.5%	26.7%
	染料液で10分間 もみ染した後、 同液で5分間煮 染した絹	36.2%	33.2%	29.2%
	染料液で10分間 もみ染した後、 同液で10分間煮 染した絹	28.5%	28.3%	28.6%

上記Aより染料を3%濃く染色した場合の汚染度

カヤ ファ スタ ブ ラ ック B G L R ○ 四 ・ 五 % (計8.5%)	酢 5分間もみ染後 2分間煮染	33.7%	33.3%	34.2%
	酸 5分間もみ染後 10分間煮染	27.3%	25.0%	23.7%
	10分間もみ染後 5分間煮染	30.5%	34.1%	32.2%
	10分間もみ染後 10分間煮染	30.4%	24.9%	25.2%



上記 B より染料を 3%濃く染色した場合の汚染度

C	カヤ カラ ン ブ ラ ク ク B G L	フ ァ ス ト ブ ラ ク ク R	ダ ー ク グ リ ン B A	酢 酸  ○ ・ 二 %	5 分間もみ染後	2 8.8 %	2 5.8 %	2 4.4 %
					5 分間煮染			
					5 分間もみ染後	2 3.3	2 3.5	1 8.5
					10 分間煮染			
					10 分間もみ染後	3 0.2	2 8.5	2 4.9
					5 分間煮染			
					10 分間もみ染後	2 7.5	2 3.0	2 4.2
					10 分間煮染			
					(計 12.5%)			

上記表をまとめてみるとつぎのとおり。

ア 緋締めにおける絹糸の手取り本数別の緋汚染度（この汚染度は平均値）

絹糸 16 本整経の緋	3 0.5 %
“ 20 本 “	2 8.7
“ 24 本 “	2 6.7

イ 染料の濃度別の緋汚染度

5.5 % で染色した緋	3 1.3 %
8.5 % “	2 9.5
12.5 % “	2 6.7

ウ 染色法別の緋汚染度

5 分間染液でもみ染した緋	3 2.1 %
5 分間染液で煮染した緋	3 3.9
10 分間染液でもみ染した緋	2 8.6
10 分間染液で煮染した緋	2 7.2

まとめ

上記結果を見ると、合成染料染色における緋の汚染は整経で絹糸の本数が多くなるに従って汚染し、又染料の濃度が濃くなるに従って汚染し、さらに染液でのみ染や煮染が長い程緋が汚染する結果が得られている。

## 2. 緋締加工における締め密度と糊粘度別緋の汚染度

大島紬は原料絹糸を10数本引揃え、糊で固めた糸束を綿糸で織締め加工した緋ムシロを染色して緋を造るのであるが、この加工の糊付けにおける糊の粘度と締め密度による緋の汚染度は下記のとおり。

### ア 試料

30g付き経絹糸16本引揃え整経した糸

### イ 糊の粘度別

海草糊の粘度を下記の粘度に調製し、上記2-アの糸に各々糊付けして乾燥

糊の粘度A …………… 1,000 CP

糊の粘度B …………… 500 CP

### ウ 緋締加工別

上記によって糊付けした各糸を各々下記によって締め加工をなす。1センチ間に9本打込密度と12本打込密度の緋ムシロを作製して下記により染色

### エ 染色法

上記4種の緋ムシロをシャリンバイ液で61回、石灰17回、泥土で4回の大島紬の泥染法によって染色

### オ 緋の汚染度調査

上記(エ)によって染色した緋ムシロの綿糸を取り除き、各緋の汚染度を工業規格のグレースケールで測定した結果は下記のとおり。

- 糊の粘度Aで締め加工の打込密度9本の緋汚染度 2～3級
- 糊粘度Aで締め加工の打込密度12本の緋汚染度 3～4級
- 糊粘度Bで締め加工の打込密度9本の緋汚染度 3級
- 糊粘度Bで締め加工の打込密度12本の緋汚染度 4級

### まとめ

大島紬の緋加工において綿糸で緋加工して防染した部分に染料が浸透汚染する原因は、緋加工前の糊粘度が低い場合と緋加工における打込密度が少ないのが緋に染料が浸透汚染する率が高い。

## 第4章 赤及び黄色先染の緋ムシロを黒色に染色する方法

赤及び黄色を先染した緋ムシロを黒色に染色する場合、赤や黄色の緋は黒く染色されにくいので、下記の方法で染色する。

### 1. 赤色先染緋ムシロを黒く染色する方法

黒の染料10%にダークグリーン1～2%, 酢酸は普通より多い目(3%程度)加えた染液で十分もみ染し, 煮染も普通より長く(10分程度)おこなって染色する。

### 2. 黄色先染緋ムシロを黒く染色する方法

黒の染料10%にバイオレット2～3%, 酢酸は普通より多い目(3%程度)に加え, 十分もみ染し, 煮染も普通より長く(10分程度)おこなって染色する。

### 3. 以上の方法で黒く染色されない時の染色法

緋ムシロを2g/lのヒドロサルファイト液で赤の緋はピンク色程度, 黄色の緋は淡黄程度に抜染及び水洗いした後, 上記の方法で染色すると黒く染色される。

但し, この方法で染色すると手数がかかることや, 毛羽が発生し易いこと, さらに緋用の糊や締めが弱いと緋を汚染する恐れがあるのでこれ等を考慮に入れて抜染及び染色すること。

## 備考

上記染色で赤緋の場合, グリンの染料を加える理由は, グリーンは赤色の餘色(反対色)であるから赤色を消す作用をするので赤色が消えて黒色になり, 又, 黄色緋の場合バイオレットの染料を加える理由はバイオレットは黄色の餘色(反対色)であるから, 黄色を消す作用をするので黄味が消えて黒色になるので, この原理を生かして赤及び黄色緋は染色すると良い。

さらに赤味のあるブラックの染料にダークグリーンを少量加えて染色するのはブラックの赤味をグリーンで消す原理からで, ブラック独自で染色するより黒味が濃く染色される(見える)ので黒染にこの方法がおこなわれる。又, 泥染の地糸を藍下染するのはこの原理によるものである。

## 第5章 カブセ染法

この染色は地染した緋ムシロに数色部分染する場合, 先に染色した部分をくくるとか摺込染することなく, 浸染法で先に染色した色の上に重ねて数色の色を染色する方法である。

### 1の例

3色の濃淡の菊の柄があるとす。これを染色する場合, 先に濃い色の菊の柄を部分解きし, 浸染法でこの部分を染色, 乾燥後蒸熱処理する。

つぎに2番目に淡い柄の部分を部分解きして先に染色した部分をくくることなく、そのままこの2番目の色を浸染法で染色。

つぎに3番目に淡い色の柄の部分を部分解きして2番目の染色と同様、先に染色した部分をくくることなくそのまま3番目の淡色を浸染法で染色すると、3色の色を摺込染等の手数を要さず染色される。

## 2の例

グリーンと黄の色の柄があるとする。この場合、グリンの部分を先に部分解きし、ここを青色を染色、つぎに黄色の部分を部分解きし、染色は先に染色した青色の部分をくくらずにそのまま黄色を浸染法で染色すると、先の青色はグリーンになり、2番目の黄色はそのままに染色され、これでグリーンと黄色が浸染法で染色される。

さらにこの染色で下記の色も染色される。

- ムラサキ色と赤色，ピンク色，青色
- 茶色と黄色，グレー，オリーブ色，金茶色，淡茶色
- 赤色とピンク色，淡いオレンジ
- オレンジ色と赤色，黄色

以上の方法で染色することをカブセ染又は重ね染法といっている。

## 備考

この染色で大切なことは、

ア この染色は水洗に堅牢な染料で染色することである。それは2回目に染色する際、先に染色した色が落ちて後に染色する色を汚染させないためである。したがって染色毎に蒸熱処理して堅牢度を高めておくことである。

イ 1色目及び2色目の色は、2・3色目の色を重ねて染色するとどのような色になるか、逆算して染料は調合して染色することである。

ウ 染料は染着が早い染料が良い。これは地色や先に染色した色が落ちない内に目的の色が染色されるようにするためである。

エ 又、最初から酢酸を少量加えて染色する方法が良い。これは先に染色した色が落ちないためと、目的の色が汚染されない内に染着させるためである。

オ この染色で注意することは、浸染中先の色が落ちると後の色を汚染するので、この染色で色落ちがひどい場合は緋を絞り上げた後、この染液を全部捨てた後、清水を入れこれに新しく染料、助剤を加えてさらに染色することである。

## 第6章 染色前の絣ムシロの糊抜き法

絣ムシロ染色で白絣に染料が浸透汚染して品質を低下させるとか、逆に十ノ字が切れず、ムラ染になるのはこの糊抜き如何による場合もあるので、この糊抜きも重要な作業の一つである。この糊抜き法について記すと、

ア 十ノ字の多い絣、例えば小柄のような絣や絣締めが堅い絣、さらには手取の多いヨコ絣等は前日から水に浸漬しておいて染色前に良く水洗い糊抜きする方法が良い。

イ つぎに十ノ字が少ない地あき絣や絣締め用の糊粘度及び絣締めが弱い絣ムシロは前日から水に浸漬しない方が良い。このような絣ムシロを水に長く漬けると、締めた中の糊まで抜けてしまい、染色によって絣を汚染するからである。

ウ 糊抜きの程度を判定する方法は、絣を絞ると糊状のものが出るとか、絣を絞った水滴がローソクのような色をしている場合は糊抜き不十分である。又、糊を抜いたタライの水が上記のローソクのような色をしているものは十分糊が抜けていないと判断して良い。

エ 糊抜き剤を加えて糊抜きするのは、前に記したように十ノ字や絣締めが堅い絣は糊抜き剤を使用しても良いが、地あき絣や締めの弱い絣は糊抜き剤を使用しない方が良い。

オ 絣ムシロを良く染色するには絣ムシロを水に浸けると、フスに付いている糊が膨張して防染の働きをするので、糊粘度や絣締めに堅くする必要があるというのはこの理論によるものである。

カ したがって染色は締めた中の糊がそのまま残っており、水によって糊が膨張している状態で染色することである。

キ 又、絣を十分糊抜きしないで乾燥させてから染色すると十ノ字が切れにくい染色になり易い。

## 第7章 泥染した絣を総解き揚粹した絣糸の合成染料染色法

### ア 絣の準備

この染色は白糸を染色するのと異なり、糊張り、絣締め、泥染してあり、又揚粹してから染色するので特にムラ染になり易いので、揚粹した絣のくくり目が染色中狭くならないように輪を広くゆっくりくくること。

### イ 絣糸の糊抜き

この絣は、堅い糊で糊張りし、さらに締め加工、泥染してあるのでこの糊が溶

解しにくくこれがため色ムラの原因となるので、この糊は十分溶解して染色することが大切である。

その方法は、前日または数時間前に0.5%以下のアミラジンの温液に浸漬した後、絣糸をつつきや振り洗いして絣糸から糊分を完全に除去して染色することである。

## ウ 染色

染液に均染剤のプレスタピットオイルかアミラジンを0.05%程度と、溶解した染料を少量加えて染色する。つぎに染竹に絣糸を多く掛けないようにすること。染色は冷液から染始め、振付け染、さらには絣を両手でもみ染しムラにならないように染色、その後絣を取り上げ、つぎに先に溶解した染料を追加して前記のように染色する。ここで染着が悪い時は酢酸を少量と染料を加えて染色し、さらに昇温と染料を追加して目的の色に染色する。この場合、昇温はゆるやかにし、又絣糸を繰返しムラ染防止に重点して目的の色を染色して水洗いする。

## 第8章 泥染した絣を総解き、揚粹した絣糸の植物藍による淡藍染法

### ア 絣の準備

前記第1章に準ずる。

### イ 絣の糊抜き

前記第1章に準ずる。

### ウ 染色

この染色は先の合成染料と異なり特にムラ染になり易いので始めから発酵の良い藍で染色しないよう、使い古しの藍で2回程度染色してから良い藍液で染色する。この場合特にムラ絞になり易く、これがムラ染となるのでこの染色の糸絞りは4・5回おこなって絞りムラがないようにし、藍液での浸染を繰返して目的の濃度の藍色に染色して水洗いする。

## 第9章 泥染した絣を総解きし揚粹した絣糸の植物染料による染色法

### ア 絣の準備

前記第1章に準ずる。

### イ 絣の糊抜き

前記第1章に準ずる。

## ウ 媒 染

10%の明ばん溶液で2・3時間糊抜きした緋糸を常温液で媒染した後水染いして  
いしてつぎの染色に移る。

## エ 染 色

染液に溶解した植物染料を加えて振り付け染して50・60℃に昇温して染色する。  
ここで目的の色に染色されない時は、もう一度先の媒染液で媒染して、さらに染  
料液の追加や昇温する等して目的の色に染色する。この場合ムラ染になり易いの  
で緋糸を両手でもんで染色すること。このようにして媒染の繰返しや染料の追加、  
煮染等をして目的の色に染色し、煮染不十分の場合は蒸熱処理して仕上げる。

## オ 備 考

- つぎにこの染色は市販の植物染料はもとより、奄美に自生しているシヤリンバ  
イの淡色染や福木、その他モツコック等による淡色染色もこの方法で染色する。
- この場合、グレーを染色する場合は鉄媒染でも良いが、金茶色等きれいな色を  
染色する時は鉄鍋での染色や泥染、さらには鉄分が含まれている水での染色や水  
洗いは色がくすむのでこれに注意して染色すること。
- つぎにこの草木染の淡色は日光に不堅牢な点があるので、堅牢な染料染と熱処  
理を十分おこなうこと。
- 以上この3種の後染は色が合いにくいのでこれ等の染色は1仕切とか1疋分、  
2疋分と染色し、特に緯緋はその疋数に不足しないように染色すること。